

〈公募論文〉

アンセルムスの幸福主義

——意志決定における正直と有益性のかかわりから——

齋藤大樹

はじめに

カンタベリのアンセルムスを中世において際立ったものとしているのは、理性を重視する姿勢である。そのことは著書の一つである『モノロギオン』において「理性のみによって」(sola ratione)という立場を明確に表明し、従来は信仰に属する事柄、神の存在すらも理性的証明の対象としていることから窺われる。その姿勢は人間の意志について論ずる場合も例外ではない。アンセルムスは人間精神の能力として理性と意志の二つをあげており、理性による証明と同様に、意志の働きについても重要なものと考えていた。アンセルムスにおいて意志が向かう対象は、極めて簡潔に述べるならば、「為すべきこと」か

「利益となること」のみとされる。それは換言すれば人間が何事かを為そうと意志するのは、その何事かが自らにとって「為すべきこと」であるか、「利益となること」だからである。そして「為すべきこと」には「正直」(rectitudo)、「利益となること」には「有益性」(commoditas)という概念が関わっている。本稿の目的は、意志決定におけるそれら二つの概念の働きを通じて、アンセルムスにおける幸福主義の特徴を明らかにすることにある。

ところで中世哲学において意志について論じられる際、しばしば扱われるアウグスティヌスに対し、アンセルムスが取り上げられることは稀である。その理由の一つとして、アンセルムスの意志論は著しく理念的であるという指摘をあげることができらる。小野忠信はアンセルムスの議論は、アウグスティ

ヌスのように厳しい現実には密着していないとして⁽¹⁾いる。たしかにアンセルムスはアウグスティヌスのように、自身の厳しい苦悩に基づいた意志論を展開していない。しかし、その点のみをもってアンセルムスの意志論が単なる理念的なものであると言ふことはできない。というのは、アンセルムスは罪への誘惑に直面し、利益に囚われた人間の意志決定について詳細に分析しているからである。

また Sandora Visser と Thomas Williams は『悪魔の墮落について』において論じられている天使の意志決定についての議論から、人間の自由意志について考察している。この研究は善なる天使と悪しき天使の意志決定について論じており、そこからアンセルムスにおける自由の定義を見出そうとしたものである⁽²⁾。それは天使と悪魔という善と悪が明確に定められた存在を考察することで、諸々の問題を解決しようとしたアンセルムスの意図に従ったものであると言ふことができよう。しかし本稿においてはそのような天使の意志決定を、いわば思考実験として捉えることにより人間の意志決定に関わる問題をより明確にすることを目指したい。

さらにアンセルムスの幸福主義の独自性を指摘したものとしては Katharin Rogers の研究があげられる⁽³⁾。Rogers はアンセルムスにおける自由について考察する中で、人間の意志決定について論じているが、そこで「正直」と「有益性」の関わりに触れている。この研究はアウグスティヌスの自由意志論

との対比からアンセルムスにおける自由意志の独自の立場を示そうとしたものであり、幸福主義を主題としたものではないため、詳細な記述は無いものの、多くの示唆を受けた⁽⁴⁾。

以上の研究を踏まえ、本稿においては、アンセルムスによる意志 (voluntas) の実際上の働きに関する議論から、アンセルムスが考える人間の意志決定において「正直」と「有益性」という二つの概念がどのような意味を持つのかを考察し、アンセルムスの幸福主義の特異な点について明らかにしたい。そのため、議論の手順は次のようなものである。まず第一節において、精神そのものの能力である理性と意志とのかかわり、意志決定における両者の働きについて『モノロギオン』における記述を手がかりに考察し、さらに『自由選択と予知、予定および神の恩寵の調和について』(以下『調和について』とする)における「意志」の分類について論じる。次に第二節において『悪魔の墮落について』における天使の意志決定を取り上げることで、前節において示した意志決定に関わる二つの要素が、それぞれどのようなものであるのかを明らかにしたい。最後に第三節において、人間が悪を為す際の選択についての議論を通じて、意志が持つ力である物事を選択がどのようにして為されるのかについて考察する。意志決定において重要と考えられるのは「正直」と「有益性」という概念であり、両者の関係がアンセルムスの幸福主義の特徴であると考えられる。

一 意志の構造と意志決定における働き

『モノロギオン』という書は一般的に神の存在証明によって知られている。しかし存在証明に充てられるのは前半部分のみであり、後半の主題は神認識の問題である。有限な存在にすぎない人間が、いかにして無限の存在である神を認識することが可能になるか、という問題が論じられているのである。この書においてアンセルムスは次のように述べる。「全ての存在の中でも理性的被造物のみが最高の本質 (summa essentia) の探求に向かうことが可能であり、精神そのものはそれによってのみこの本質の解明を最高に達成できる⁽⁵⁾」。そして「理性的被造物は意志的行為によって、その生来的能力を通して自分自身に刻み込まれているこの像を表現することを何よりも努めるべきであるという結論になる⁽⁶⁾」。これらの記述から次のことが理解されよう。すなわち人間の精神そのものの能力としては理性と意志があげられ、それらは神に向かうべきものであるということである。すなわちアンセルムスにおいて理性と意志は神に向かうという義務を果たし、共に正しく働くことによって人間は神認識に近づくことが可能になるとされるのである。

ではそれらの働きとはどのようなものであるか。理性については『モノロギオン』において明快に述べられており、善と悪など相対立するものを区別する能力であるとされる。しかし理

性の働きとは、あくまで物事を区別するに過ぎず、意志に対し選択肢を示すに過ぎない。その選択肢の中から、善を選び取るのは意志の能力によるのである⁽⁷⁾。善とされるものを選択することによって、上に述べた「内なる神の像の表現」は可能になるのである。

以上のように『モノロギオン』においては神認識の問題から理性と意志のかかわりが述べられている。しかしそこで述べられているのは意志の「為すべきこと」であり、意志の具体的な活動については十分に述べられていたとは言えない。たしかにアンセルムスにおいて人間の意志を主題とした書は、初期のものに属する『選択の自由について』という小論のみであるが、他の著作においてもアンセルムスは人間の意志の構造、あるいは意志決定の問題について度々言及しているからである。そこでそれらの記述から理性と共に働き、神認識に近づくために不可欠なものである意志の構造について考察することにしたい。

アンセルムスが人間の意志の構造について詳細に論じているのは、晩年に書かれた『調和について』である。アンセルムスは意志を身体における手足のような、いわば靈魂の器官として捉えていたのであるが、何かある器官について考察する場合、第一にその器官そのものについて、第二にその器官の在り方、あるいは使われ方について、第三にその器官の実際の使用について考察されなければならない。意志についても同様にこれら三つの点から考察される。すなわち意志を、意志する道具

(instrumentum)、意志の意向 (affectio)、意志の使用 (usus) として捉えるのである。⁽⁸⁾ここでは、人間の意志構造を明らかにするという目的上、第一と第二の意味における意志について見ていくことにする。

第一の意味における意志、つまり意志する道具としての意志については容易に理解できよう。われわれは何かを見るときに視力を用い、何かを判別するとき理性を用いているように、何かを意志するときには意志を道具として用いている。さて、われわれが何か道具を使用するとき、例えば目の前にあるペンをを使う時、あるいは身体の器官を道具として捉えるならば手足を動かす時、われわれは自らの意志によってそれらを動かす。では道具としての意志は何によって動かされるか。それもまた当然意志そのものによって他ならない。つまり意志はその動かされるものであるのと同様に、動かす者でもある。アンセルムスは人間の意志を自己作用的道具 (instrumentum se ipsum movens) と呼ぶ。そしてこのような道具としての意志に作用し、その意志が向かう方向を定めるのが意志の意向である。意志の意向とはわれわれの道具としての意志に働きかけ、その方向を決定する意志である。したがってわれわれが一方を選択し、他方を選択しないという意志決定を行う際、最も重要となるのがこの意味における意志、つまり意志の意向であるということになる。次節においてはこの意志の意向について詳細に論じることにした。

二 二つの意志の意向

——有益性への意志と正直への意志——

われわれが日常生活において何事かに意志を向け、行為しようとする時、その事に意志を向けるのは、それが自らにとって利益となると思われるからか、たとえ利益にはならずとも、為すべきことであると思われるからである。⁽⁹⁾アンセルムスは「自らの利益になるものへの意志」を有益性への意志、「為すべきことへの意志」を正直への意志と呼ぶ。この正直という概念はアンセルムスの思想全体を貫く概念であり、彼の意志論を理解する上でも重要なものであるので、ここで簡単に触れておきたい。

この正直という概念は『真理について』において初めて言及された概念であるが、アンセルムスの存在論と深く関わる概念である。⁽¹⁰⁾しかしここではアンセルムス自身が端的に述べているように「事物が為すべきことを果たすときに成立するある種の価値」としておきたい。全ての事物は自身の「為すべきこと」を負っており、この「負っていること」(quod debet) を為す限りにおいて、ある種の価値を実現する。それが正直である。すなわち先に述べたこと言うならば、理性は向かうべき対象に向かい相対立するものを判別するという本来的な役割を果たすことによって正直を実現する。意志についても同様であり「負っ

ていること」を為すことにより正直を実現する。この「負っていること」つまり為すべきことを果たそうとすることへの意志が、前述の正直への意志である。こうして道具としての意志そのものに働きかけ、影響を与える意志の性向とは、第一に有益性への意志であり、第二に正直への意志であるということができる⁽¹⁾。これら二つの意志の性向に働きかけられ、道具としての意志は対象を定め、使用されるのである。それではこの二つの意志の性向により、方向付けられる意志決定とはどのようなものであるか。その問題は『悪魔の墮落について』における天使の意志決定についての考察から明らかにする。

この書は天使の意志決定について考察することで、一切の悪を含まない最善の存在である神によって創造されたこの世界における悪の存在という問題と取り組んだ著作である。現代の視点から見ると天使という存在を倫理学の領域で扱うことに奇妙な印象を受けるかもしれない。たしかに中世を通じて、天使論は神学的な意図をもって取り上げられるものであり、それはこの『悪魔の墮落について』も必ずしも例外ではない。この書において問題とされているのは、悪しき天使が墮落し悪魔となる原因となった意志決定であり、その表現は一見して神学的だからである。しかし本稿ではこの議論を、人間と異なり原罪としての悪への傾向性を持たない存在である天使の意志決定を問題とすることで、意志決定に関わる諸々の要素をより純粹に示すことを目指した考察であったと捉えることにしたい。すなわち善

なる天使と悪しき天使という二極的な存在の意志決定を考察すること、現実の様々な経験に囚われ、客観的に考察することが困難である人間の意志決定がより明確になるのである。そのため本節では天使の意志決定について見ていくことにしたい。先に述べた意志の構造についての議論は、天使にも共通のものとされる。すなわち天使の意志決定においても、その方向を決定するのは有益性への意志と正直への意志という二つの意志の性向である。人間においてはこの二つの意志の性向が共に働いており、どちらか一方のみが存在し、他方がまったく存在しないということは考え難いことである。そのためそれぞれの意志の性向の働きについて明らかにするために、アンセルムスはそれぞれの意志のみを有する天使が存在すると仮定して、議論を進めていく。

まず有益性への意志のみを与えられた天使について考察してみよう。そのような天使は当然のことながら自らにとって有益なこと、幸福であることのみを意志するようになるだろう。何事かを望む存在は必ず何らかの形で自らの意志を動かしている。そしてその自らの意志を動かすのが意志の性向であり、有益性への意志は、道具としての意志を動かし、幸福を望むのである。アンセルムスはこのように、有害なもの避け、有益なものは得ようとする意志の性向を生来的意志と呼んでいる⁽²⁾。有害なものを恐れ、有益なものを愛する存在であれば誰もが、この意志の性向を有している。そしてこの有益性への意志のみを有する

天使は、自らにとって「利益となること」、幸福のみを追い求める存在なのである。

ただしここで注意しなければならないのは、これまでの議論において言われている幸福はあくまで一般的な意味における幸福であり、たとえば富や名譽など「全ての人が、不正な人でさえも望むような幸福」である。しかし当然のことではあるが、アンセルムスはそのような幸福を求める意志のみが存在すると考えていたわけではない。むしろある意味においてはそれとは反対の「為すべきこと」を為すことを望むように道具としての意志を動かすであろう正直への意志を重視していたとも言える。そのことは次に見る正直への意志のみを与えられた天使についての議論を見ることで明らかになるだろう。

正直への意志のみを与えられた天使は、正直と合致するもののみを求める。正直とはすでに述べたように「事物が為すべきことを果たすときに成立するある種の価値」であるとされる。したがって正直への意志は、意志が本来的に為すべきことへと道具としての意志そのものを向かわせる意志の傾向であると言うことができるだろう。意志は与えられた目的に従って、意志すべきことを意志している限りにおいて、正直の内にあると言われるのである。⁽¹⁵⁾では意志が与えられた目的とは何であろうか。その問いに対する答えもすでに述べているだろう。この世界において善悪を判別することが可能なのは、理性のみであり、それらを選択することは意志の役割である。この時、意志が善では

なく、悪を選択するのであれば、理性が果たした本来的な働きは全く無意味なものとなってしまいうだろう。それ故に、意志は善を選択することによって、本来的な役割を果たすと言われるのである。

以上のように有益性への意志は、あらゆる快樂をも含む幸福へと道具としての意志を向けさせる。それに対し正直への意志は意志の本来的な役割を果たし、為すべきことを為すようにと意志を導くのである。これら二つの意志の傾向が天使のみならずわれわれの内にも働いているのであり、われわれの意志はこれらの傾向によって「利益となること」か「為すべきこと」へと導かれるのである。換言すればわれわれの意志が意志するのは有益なものか正直のみ、ということになるのである。ある意味において、このような意志についての見方はアンセルムスに特異なものではないだろう。すなわち、意志の向かう対象は自分にとって有益なものか、あるいは正義とされるものであるという考えである。そしてこの両方への意志が対立したとき、正義とされるものを選択する見方はそのものの「為すべきこと」に基づく意志決定を重視し、有益なものを選択する見方はそのものにとって「利益となること」に基づく意志決定を行う、というように意志決定において対立した見方を導くとする考えが一般的であると思われる。そして「為すべきこと」の由来が究極的には神であることを考えると、有益性への意志は否定され、正直への意志のみで意志決定を行うことが、意志のあるべき姿

であると思われるかもしれない。事実、アンセルムス自身も正直への意志が、意志が本来的に与えられた目的を果たしているとして述べているからである。しかしアンセルムスはその一方で、必ずしも「利益となること」を望む有益性への意志を否定せず、この両者は必ずしも互いに排他的ではなく、一方が利益のであり、一方が正義であるという構図とはならないとする⁽¹⁸⁾。本節で述べた天使の意志決定を踏まえて言うならば、正直への意志のみを持つ天使が善なる天使で、有益性への意志のみを持つ天使が悪しき天使である、と容易に結論付けることはできないのである。次節においては、意志を向ける対象の選択がどのように為されるかについての議論から、それらの一致について考察し、アンセルムスにおける幸福主義の特徴について明らかにしたい。

三 神に似ること

——正直と有益性の一致——

アンセルムスは「意志は与えられた目的に従って、意志すべきことを意志している限り、正直と真理のうちにあつたのであり、また意志すべきでないことを意志する時、正直と真理を離脱する⁽¹⁷⁾」と述べる。つまり正直への意志を持つことが正しいあり方であると主張しているのである。しかしその一方で幸福への意志と正しさへの意志、二つの意志は共存しているものでもししている⁽¹⁸⁾。これらのことから明らかにように、アンセ

ルムスは先に述べた正直への意志は、同時に幸福への意志、有益性への意志と一致すると考えていたのである。しかしわれわれの日常的な経験において、たしかにそれらは場合によっては一致しうるが、必ずしもそうとは限らないであろう。ではそれらの一致はどのようにして理解されるべきだろうか。

ここで注意しなければならないのは、正直への意志と有益性への意志は、たしかに両者ともに道具としての意志に働きかけ、その性向を決定するものではあるが、その働きにおいては必ずしも明確に分かたれるとは限らないということである。アンセルムスによれば、人間は「誰もが何らかの形で自らにとって有益なものしか望まない⁽¹⁹⁾」のであり、人間にとって有益性への意志はつねに働いている。たとえ正しく行為する人間、すなわち正直への意志に基づいて行為する人間においても有益性への意志は働いており、その場合有益性への意志と正直への意志は共働している。アンセルムスにおいて有益性への意志に合致した行為を選択するということは、必ずしも誤りであるとされず、有益性の意志は、それ自体としては悪であるとはされないのである。

このような意志決定についての考え方はある意味において功利的な選択を肯定しているように捉えられるかもしれない。というのには、意志の働きにおいて、有益性への意志がつねに働いていることはすでに述べたとおりであり、そのような意志はつねに道具としての意志を自らにとって利益とされる方向へと向

かわせるからである。たしかに以上のようなアンセルムスの意志論を古代以来の幸福主義の流れの中に位置づける見方も存在する。その見方に従うならばアンセルムスの意志論は、意志決定が正直と有益性の間で行われるという点において標準的な幸福主義からは分かれたるものの、自らにとって幸福とされるものをつねに選択するという意味において、幸福主義であるとされる⁽²⁰⁾。アンセルムスにおいて「幸福」と「有益」はしばしば置換的に用いられており、両者は明確に区別されず、全ての理性的存在が望んでいる幸福とは、有益なものから成り立っているのであると考えられているからである。したがって有益性への意志がつねに働いており、人間は「有益なものしか望まない」と考えるアンセルムスの意志論を、幸福を望むことを第一の原理とする幸福主義の一種と捉えることは必ずしも誤りであるとは言えないのである。しかし注意しなければならないのは、アンセルムスにおいて幸福という語は必ずしも現代において一般的に用いられる意味と同じではないという点である。

先に述べたように、有益性への意志により方向付けられた意志が望む幸福には、富や名譽のような、現世的な快楽が多く含まれていた。その意味において、これまで論じてきた幸福とは、現代において理解される幸福と異なるものではなかったと言える。しかし当然のことではあるが、アンセルムスはそのようなもののみを幸福と考えていたのではない。幸福の内でも考えられる限りの究極的な幸福は「神に似ること」とされているので

ある。というのは、神は唯一永遠の存在であり、快楽のような現世的な幸福と異なり、決して失われえないものだからである。この点において、アンセルムスにおける幸福は、神との一致を究極的な幸福とする他の中世における幸福主義と変わりはない。しかし幸福なるものは有益であるとするアンセルムスの考えはこの究極的な幸福においても適用され、「神に似ること」は諸事物にとって最も望むべき幸福であると同時に、最も有益なものということになるのである⁽²¹⁾。

以上の点を踏まえて先の問い、すなわち正直への意志は有益性への意志と一致しうるか、という問いについて考察してみよう。有益性は最善の存在である神に近づくことが有益であるとされており、その意味において有益と善は一致している。さらにアンセルムスは善の一つとして有益性があげられることを明らかにしており、有害なものは悪とされる。しかしその一方で人間が有益性への意志のみによって物事を選択した際、そこで選択されたものはある意味においては有益であり幸福であるが、善であるとはされないのである。この一見矛盾のようにも思える言説はアンセルムスが「善」という語を二義的に使用していることから起こっている。善は「利益となること」を表すと同時に、「正義」(iustitia)を表しているのである。先に述べたように人間は「有益なもの」のみを望む。しかし例えば「悪をなすこと」という選択は正しい存在である神に似ることから離反する選択であり、したがってその選択は有益という観点からは善

でありながら、正義という観点からでは悪とされるのである。したがって幸福と善の関係は次のようにまとめることができるだろう。善は必然的に有益と一致するが、有益は必ずしも善と一致しない。「神に似ること」に近づく行為は有益であると同時に正義である。しかし離反する行為はある意味において有益ではあるが、正義ではないのである。したがって一般的な幸福という観点からみると、どちらの選択も有益であるという意味では幸福である。しかし究極的な幸福という観点からみると神から離反する選択は幸福とはされないのである。このことを換言すると次のようになるだろう。正直への意志は必然的に有益性への意志と一致するが、有益性への意志は必ずしも正直への意志と一致しない。正直と合致する行為—正しい行為はつねに有益性とも合致するが、逆は必ずしもそうではない。有益性への意志はつねに、いかなる選択においても働くものであるが、正直への意志は放棄されるものなのである。

以上のようなアンセルムスの意志論はやはりある意味において、功利的な選択を肯定しているとみなされる危険性があるだろう。というのは意志決定において正直への意志と同時に働く有益性への意志は、つねにより有益な選択へと意志を導くからである。それは究極的な幸福についても同様であり、「神に似ること」という最大の幸福へと向かうために正しい選択を為すのであれば、その意志決定は功利的に為されたと言わざるをえないだろう。しかし注意しなくてはならないのは、たしかにア

ンセルムスは有益性への意志によって意志が方向付けられることを否定してはいないものの、正直を有益であるという根拠のみで選択するよう説いているのではないということである。有益性への意志は人間から切り離すことのできないものであり、正直へ意志を向けるときも有益性への意志と共にそれは行われているのであるが、人間はその正直を有益であるから望むのみではなく、望むべきであるがゆえに望まなければならない。またそれによって意志の正直は実現する、すなわち意志は本来的な役割を果たすのであり、アンセルムスはその意志の正直を正義と呼ぶのである。仮に有益性への意志のみによって導かれた選択が、正直に合致していたとしても、それは正義であるととされれない。アンセルムスにおいて正義とは、人間の意志が選択すべきものを選択すべきであるが故に選択する—すなわち意志としての本来的な役割を果たす—ことであり、そのことによって究極的な幸福に近づくことが可能になるのである。

そしてまさに以上の点にアンセルムスの幸福主義の特徴が存在する。アンセルムスは決して、有益なものを望む意志を否定することはしない。なぜなら「神に似ること」が究極的な幸福であるならば、それは必然的に究極的に有益なものでなければならぬからである。換言すれば、正義や究極的な幸福は有益なものを望む有益性への意志を否定し、放棄して得られるものではない。有益性への意志は人間の意志と—天使の意志とすらも—不可分のものであり、つねに働いているのである。そ

の意味においては現世的な快楽も含むあらゆる幸福は、究極的な幸福と、絶対的な差異を持ちつつも、共通点を持つて語ることが可能なのである²³。しかし、注意しなければならないのは、それが単に有益なものを求める意志を肯定するものではない、ということである。究極的な幸福である「神に似ること」はたしかに最も有益なことではあるが、それは有益であるがゆえに望まれるものであってはならず、望まれるがゆえに望まれなければならぬ。その点からもアンセルムスの意志論は単純な幸福主義とは分かれたるのである。

おわりに

以上のように、人間の意志は有益性への意志と正直への意志によって方向付けられており、両者が共に働くことによって究極の幸福に近づくことが可能になることが示された。「神に似ること」を究極的な幸福と考え、それを目的とするのは中世における一般的な幸福主義と言える。しかしその究極的な幸福が「有益なもの」に含められることが、アンセルムスの幸福主義の特異な点である。アンセルムスにおいて「有益なもの」を選択することは必ずしもそれ自体としては悪ではない。人間の意志において両者は共働するものなのである。そのような有益性への意志が道具としての意志から不可分的であるのに対し、正直への意志は可分的である。有益性への意志が強まり、正直

への意志を放棄するとき、有益性への意志のみで物事を選択するのであり、それが正直への意志が有益性への意志に屈するという事態である。それとは反対に、正直への意志が有益性への意志と共に働くことにより、意志は正直へ向けて正しく秩序付けられ、意志の正直が実現することになる。意志が望むべきものを望み、正しく秩序付けられることによって、両者は一致しうる。ただしその場合にも有益性への意志が完全に否定されることは決してなく、有益なものを望む意志は消し難く働いている。両者は共に働くことによって、意志は為すべきことを為し、本来的な役割を果たすことができるのである。その意味において正直への意志は有益性への意志と一致しつつも、厳格に秩序付けられた一種の義務的なものとして捉えられるべきであり、意志は動物的な、非理性的な情欲に流されず、人間の、理性的意志によって正直を選択しなければならぬ。それによって意志は正義であり、「神と似ること」という究極的な幸福へ至ることが可能となる。有益性への意志を否定することで究極的な幸福に至るのではなく、究極的な幸福すらも有益なものとなし、その一方で正直への意志によって望むべきであるがゆえに望むことによって、究極的な幸福に至るとする点が、アンセルムスの幸福主義の特徴であると言えるだろう。

注

テクストは主としてシュミット新版 (Anselmi, Cantuariensis

Archeiscopi, Opera Omnia, Tomus Primus, hrg. von Franciscus Salesius Schmitt, Stuttgart-Bad Cannstatt 1967.) 4冊より。

Anselmi, Cantuariensis Archeiscopi, Opera Omnia, Tomus Primus.

hrg. von Franciscus Salesius Schmitt, Stuttgart-Bad Cannstatt. 1968.

Anselm von Canterbury. *De veritate*, Stuttgart 1966.

—— *Monologion*, Stuttgart 1964.

アンセルムス 古田暁訳『アンセルムス全集』聖文社、一九八〇年。

- (1) 小野忠信『アンセルムスの神学』新教出版社、一九八五年、p.203.
- (2) S. Visser and T. Williams, *Anselm's account of freedom*, in: *Anselm*, Cambridge University Press, 2004, p.179.
- (3) Katherin Rogers, *Anselm on Freedom*, Oxford University Press, 2008, p.58.
- (4) *Ibid.*, p.28.
- (5) Anselm von Canterbury (1033-1109), *Monologion*, Stuttgart 1964, S.192.
- (6) *Ibid.*, S.196.
- (7) このことは意志が理性の上位に位置することを意味しているのではない。たしかに理性による判別を意志は無意味なものたしうるのであるが、理性が善悪を判別しないのであれば、

意志は選択するよりもなごうかたいである。

- (8) *De concordia praescientiae et praedestinationis et gratiae dei cum libero arbitrio*, in: *Opera Omnia*, 1968, p.280.
- (9) *De casu diaboli*, in: *Opera Omnia*, p.24.
- (10) Helmut Kohlenberger, *Sola ratione*, Stuttgart 1970, S.36. 諸事物は正直を表現するよりもよく、より真なる仕方と存在するよりもよくあるべきである。
- (11) Anselm von Canterbury. *De veritate*, Stuttgart 1966, S.42.
- (12) アンセルムスはここでは、有益性への意志を幸福への意志と言ふ表している。後述の通り、両者は必ずしも同一のものでは無いが、しばしば置換的に使用される。
- (13) *De casu diaboli*, in: *Opera Omnia*, p.254.
- (14) *Ibid.*, p.254.
- (15) *De veritate*, p.46.
- (16) Katherin Rogers, *op. cit.*, p.66.
- (17) *De veritate*, S.46.
- (18) *De casu diaboli*, in: *Opera Omnia*, p.258.
- (19) *De casu diaboli*, in: *Opera Omnia*, p.254.
- (20) Katherin Rogers, *op. cit.*, p.58.
- (21) *De casu diaboli*, in: *Opera Omnia*, p.256.
- (22) アンセルムスは被造物が神に似ようとすることは、能力を考えるならば不適當ではあるが、神が最善の存在である以上、被造物がそれを望むことは当然であると考えていた。
- (23) 被造的世界における諸々の幸福を単に否定せずに究極的な

幸福に至らうとする姿勢は「モノロギオン」における「最高に善なるもの」としての神の存在証明にも通じるものである。この証明においてアンセルムスは世界に存在する諸々の善から、神を推論した。

(24) *De conceptu originali et de originali peccato*, in: *Opera Omnia*, p.152.

参考文献

- Katherin Rogers, *Anselm on Freedom*, Oxford University Press, 2008.
- Sandra Visser and Thomas Williams, *Anselm's account of Freedom*, in: *Anselm*, Cambridge University Press, 2004, pp.170-203.
- Katherin Rogers, *The Anselmian Approach to God and Creation*, The Edwin Mellen Press, 1997.
- Benedikt Schick, *Willensfreiheit bei Anselm von Canterbury*, Berlin 2008.
- Engelbert Reectenwald, *Die ethische Struktur des Denkens von Anselm von Canterbury*, Heidelberg 1998.
- Heinz Kulling, *Wahrheit als Richtigkeit*, Bern 1984.
- Helmut Kohlenberger, *Sola ratione*, Stuttgart 1970.
- Martin Tillmann, *Einheit des Geistes und Gotteserkenntnis*, Frankfurt 2002.

(キリシタン・ボランティア・同志社大学)